様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　８ 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ２０５２９

研究課題名（和文）アフガニスタンにおける国民統合政策の変容に見るエスニシティ間対立構造の分析

研究課題名（英文）Analysis of the structure of conflict between ethnicities in the transformation of national integration policy in Afghanistan

研究代表者
登利谷　正人（TORIYA, Masato）

東京外国語大学・世界言語社会教育センター・講師

研究者番号：９０７１１７５５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、パシュトー語やウルドゥー語の一次資料文献アフガニスタンにおけるエスニシティ対立構造について、ターリバーンをめぐる問題、およびパシュトゥーンと いうエスニシティ集団を軸とした近現代政治史という大きな枠組みの観点からの分析を行った。まず、ターリバーンについて、関係者などが記したパシュトー 語文献の分析結果をまとめ、重要人物個人の状況と2001年に崩壊した前政権における統治状況について再検討を行った。パシュトゥーンを取り巻く歴史的背景に ついては、20世紀中盤に高揚した「パシュトゥニスターン運動」について、当時の文芸誌や刊行物などを軸にその状況の解明を進めることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
アフガニスタンにおけるエスニシティ対立構造について、その時々の個別の状況に留まらない比較的長期的視点、およびパキスタンとの関係を含めた地域政治の視点、さらには現地の状況をパシュトー語やウルドゥー語といった一次資料を活用した分析を行うことによって、ほとんど実態が不明な研究課題に関して、今後の研究を進める上での基盤を一定程度固めることができた。このような学術的意義に加えて、特に2021年8月におけるアフガニスタンの政治状況の変化とその後の同国と周辺地域の状況を考察する上で、歴史的視点に立った本研究は今後の指針を検討する上で社会的意義を有するものであったと考えられる。

研究成果の概要（英文）：In this research, I analyzed the ethnic conflict structure in Afghanistan from primary sources mainly in Pashto and Urdu, not only the Taliban issue, but also the perspective of modern political history concerned on the Pashtun ethnic group. Firstly, I summarized the results of an analysis of Pashto sources written by people concerned about the Taliban, and re-examined the situation of important individuals and the governance situation in 'the previous Taliban regime' that collapsed in 2001. Regarding the historical background surrounding Pashtun, he was able to elucidate the situation of the "Pashtunistan movement" that was on the rise in the middle of the 20th century, based on the literary magazines and publications of the time.

研究分野：アフガニスタン・パキスタン地域研究・近現代史

キーワード：アフガニスタン　パキスタン　パシュトゥーン　ターリバーン　エスニシティ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

戦乱の続くアフガニスタン近現代史における最大の政治課題は、国民統合政策の失敗に基づくと考えられる国内のエスニシティ間対立の深刻化である。とりわけ人口的多数派であり、かつ近代以降の同国の歴史において権力の中枢を占めてきたパシュトゥーンと、それ以外の「少数派」エスニシティとの間の対立激化は現在に至るまで多くの政治的困難と混乱の原因となってきた。このエスニシティ間対立に周辺国や大国が介入することで、さらに国内の政治状況が悪化するという事態はアフガニスタンで常態化している。近年までの研究においては、外部からの介入を典型例とする外的政治要因に基づく影響、および「先天的」にアフガニスタンが有する「多民族国家」という状況がエスニシティ分断を生み出したとする実証を伴わない見解が学術研究上も大勢を占めていた。

このような十分な検証を伴わない曖昧な研究状況が研究開始当初に至るまでに大きく変化しつつあった。特に、20 世紀初頭のアフガニスタンを隣国インドのムスリムによる社会改革運動を媒介した言語であるウルドゥー語による知的ネットワーク「ウルドゥー語文化圏」の中に位置づけ、その相互連関による近代化に関する分析が開始された。しかし、これらの研究対象時期は 20 世紀初頭から 1920 年代までの分析に止まってしまっていた。そこで、アフガニスタンにおける政治的安定が比較的長期におよび、「パシュトゥーン化」政策が国民統合政策の中核となった 1930 年代以降から現代に至る状況についての本格的研究は本格的に着手されていなかった。そこで、本研究では 1930 年代以降のアフガニスタンにおける国民統合政策の変容とエスニシティ間対立の構造について、実証的に検証することとした。

２．研究の目的

本研究について申請した当初は、1930 年代以降の国民統合政策の変容がアフガニスタン社会にどのような変化をもたらしたのかという点を、特にエスニシティ間関係への影響を中心に明示することを目的としていた。これを、1930 年代～1990 年代までの時期を三つの時期に区分けしつつ、それぞれの時期を対象として分析を進める予定で研究を開始した。ところが、本研究における現地調査を含む予備調査を実施した 1 年目の後半 2020 年 3 月から新型コロナウイルスの感染拡大により、海外渡航を伴う現地調査と資料収集が長期間不可能な状況となってしまった。

そこで、当初の研究計画を大幅に変更した上で、研究を継続することを決定した。これにより、大きな研究目的に変更はないものの、具体的な研究目的も以下の通り変更した。

① 1930 年代から始まった支配階層のエスニシティであるパシュトゥーンを中心とした国民統合を志向した「パシュトゥーン化政策」の実態を、パシュトー語をはじめとする定期刊行物を中心に分析し、どのような社会変化をもたらしたのかという点について明らかにする。

② この時期の国民統合政策とその影響、特にエスニシティ関係への影響について、1930 年代～50 年代にかけてパキスタンで高揚した「パシュトゥニスターン」運動を軸に、同運動に関係した人物たちのパシュトー語やウルドゥー語の記録、およびイギリス外交文書から分析し、その動態について明らかにする。

③ 90 年代以降、特にターリバーンの出現に代表されるパシュトゥーンを中心とした「在地」の地域的イスラーム主義と外部からの影響が混交した状況が生じた時期における社会動態について、特にパシュトゥーン社会への影響を中心に明らかにする。

３．研究の方法

本研究では、研究目的に応じてアフガニスタン、およびパキスタンで刊行された定期刊行物や関係者の自伝などを含むウルドゥー語、パシュトー語、およびペルシア語の一次文献資料の分析を中心に検討を実施した。さらに、イギリス外交文書や報告書資料についても検討対象とした。研究実施前の計画では、海外調査の実施によるパキスタン、インド、アメリカ所蔵のアフガニスタン関連定期刊行物を含む一次資料、および外交資料文書を検討対象とすることを計画していたが、海外調査実施が困難な状況となったため、検討対象とする資料を変更して研究を実施した。アフガニスタンからパシュトー語やウルドゥー語、ペルシア語による関係資料一式を購入した上で、書籍文献を重視しつつ研究を実施した。

４．研究成果

1930 年代～50 年代のアフガニスタンにおける立憲主義の高揚と一定の範囲内での出版活動自由化により、新聞を中心とした定期刊行物が多数発行された。これらの定期刊行物の分析からは、当時政府の政策の一環として実施された、「パシュトゥーン化」政策の影響を受けた形で、パシュトー語による記事の執筆が確認された。しかし、基本的にそれ以前からの公用語であるペルシア語が記事の大半を占めており、パシュトー語による記事は内容に関係する詩が記されるなど、一定の範囲にとどまっていたことが確認された。

他方、パキスタン成立前後からその後の 1940 年代～50 年代における「パシュトゥニスターン運動」については、アフガニスタンがこれに密接に関与しつつ、活発な人的交流とパシュトゥーンというエスニシティ集団を軸とした連関が確認された。この密接な人的交流はその後 1980 年代まで継続し、両国関係や米ソ冷戦下での地域内政治を含む国際関係にも多大な影響を及ぼしたが、その原点を確認することができた。

さらに、1990 年代中盤に成立したターリバーンについては、1980 年代までにアラブ世界からアフガニスタンに流入した「本場」のイスラーム主義の強い影響を受けつつ、実際に同国を統治する法体系に取り込まれていった状況が明らかとなった。また、1990 年代後半から 2001 年にかけてアフガニスタンの大半を実行支配した「旧ターリバーン政権」において発行された法令集や、当時の政権幹部たちの証言や自伝、あるいは「国交」のあったパキスタンの駐在外交官たちの記録により、その統治の状況が前述のイスラーム主義的要素と同国東部や南部を中心とするパシュトゥーン社会の規範構造が変容しつつも統治構造に影響を及ぼしている点も明らかとなった。

しかし、現在のターリバーンの統治構造やその根幹であるイスラーム思想と、変容を続けるパシュトゥーン社会の慣習のあり方については、本研究では分析することができなかった。これらの点については、本研究を踏まえつつ今後解明を進めなければならない課題である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 登利谷　正人	４．巻 69
２．論文標題 タリバンとは何か－アフガニスタン政治文化の中で考える－	５．発行年 2021年
３．雑誌名 外交	６．最初と最後の頁 34-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 登利谷　正人	４．巻 2021年9月臨時号
２．論文標題 アフガニスタンにおける政治変動の背景―歴史と近年のターリバーンをめぐる政治動向から―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 パーキスターン	６．最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 登利谷　正人	４．巻 60
２．論文標題 中東レポート①アフガニスタン：米タリバン和平でも平和の展望見えず	５．発行年 2020年
３．雑誌名 外交	６．最初と最後の頁 68－71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 登利谷　正人	４．巻 930
２．論文標題 再びアフガンスタンを忘れないために	５．発行年 2020年
３．雑誌名 世界	６．最初と最後の頁 18-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 登利谷　正人	4．巻 265
2．論文標題 パキスタン・アフガニスタンとの友好的交流の歴史－ウルドゥー語記録から見るイクバールの関与を中心に－	5．発行年 2019年
3．雑誌名 パーキスターン	6．最初と最後の頁 29－35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　4件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 登利谷　正人
2．発表標題 慣習とイスラームから見たターリバーンの構造
3．学会等名 急集会：アフガニスタン問題を考える－イスラームとジェンダーの視点から－、イスラーム・ジェンダー科研（招待講演）
4．発表年 2021年

1．発表者名 登利谷　正人
2．発表標題 アフガニスタンの現状と社会背景
3．学会等名 アフガニスタン元留学生「教え子を救え！」プロジェクト・シンポジウム「私たちはいかにアフガニスタン人留学生を教えてきたか」（招待講演）
4．発表年 2021年

1．発表者名 登利谷　正人
2．発表標題 近現代アフガニスタンの国民統合と政治動態
3．学会等名 2021年度FINDAS公開セミナー　「アフガニスタンの歴史・文化を知る」、東京外国語大学南アジア研究センター（招待講演）
4．発表年 2021年

１．発表者名 登利谷　正人
２．発表標題 南アジア圏としての近現代アフガニスタン
３．学会等名 アフガニスタンを知る―国民国家形成の問題とは―2021年度後期・日本イスラム協会公開講演会、日本イスラム協会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 登利谷　正人
２．発表標題 ウルドゥー語資料に見る20世紀初頭のカーブル
３．学会等名 第52回南アジア研究集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 登利谷　正人
２．発表標題 近代パシュトゥーン社会における水上交通と政治－中村哲医師の活動地域を中心に－
３．学会等名 2019年度 第5回 大東 西アジア研究会 「乾燥地の生活水資源利用と地域社会の変化―歴史・現在・未来―」
４．発表年 2020年

〔図書〕　計5件

１．著者名 アジア経済研究所	４．発行年 2021年
２．出版社 アジア経済研究所	５．総ページ数 588
３．書名 アジア動向年報2021	

１．著者名 重田康博、太田和宏、福島浩治、藤田和子	４．発行年 2021年
２．出版社 ネルヴァ書房	５．総ページ数 294
３．書名 日本の国際協力　アジア編－経済成長から「持続可能な社会」の実現へ－	

１．著者名 前田耕作、山内和也	４．発行年 2021年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 408
３．書名 アフガニスタンを知るための70章	

１．著者名 庄司博史	４．発行年 2022年
２．出版社 丸善出版	５．総ページ数 430
３．書名 世界の公用語事典	

１．著者名 登利谷　正人	４．発行年 2020年
２．出版社 アジア経済研究所	５．総ページ数 20
３．書名 「ターリバーンとの和平協議進展と大統領選挙実施」『アジア動向年報2020』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

東京外国語大学　研究者 https://www.tufs.ac.jp/research/researcher/people/toriya_masato.html リサーチマップ https://researchmap.jp/571105

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関